
天然娘 & ヤンキー娘っ！ 2

蜂蜜@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然娘＆ヤンキー娘っ！2

【Nコード】

N8821D

【作者名】

蜂蜜@

【あらすじ】

超天然女楽羅を入れて、お気楽なヤンキー達、ちなみに名前は右からミナ・・・（以下略）、そしてアタシ（ソラ）のヤンキー生活はまだ始まったばかり。ある日変な双子と出会って・・・？

（前書き）

今回グロは無いです。安心して下さい（笑

「ソラさん。最近仕事無いですねー」

よく晴れた日。楽羅^{かくら}とアタシ・・・水城ソラ（15）は、『アタシ達の場所』に居た。ちなみに『アタシ達の場所』とは、路地を通った空き地の場所。雨の日や気分の違う日は空き地とかに居たりする。

他の仲間^{ひとたち}達は今日はいない。居るのはミナ・・・仲間の内の一人だけだ。

アタシと楽羅は持参してきた椅子に座り、背中を合わせて暇そうに喋っていた。

「仕事ってなんだ仕事って・・・」アタシは楽羅の意味不明な言葉におもわずつつこむ。最近コイツのつつこみ役はアタシだ。何故・・・。

3

「仕事じゃないですかー。給料あるですし。でも最近貰って無いんですけど・・・」敬語で外見は可愛く、性格は天然なのだが時々言葉が荒い。そう思ったのはなんとなく、だけれど。

「お前・・・さりげなく人の金奪おうとすんな！貰ってるじゃねえかラムネアイス！」

「えー。だって、約束しましたよー。給料はラムネアイスじゃないですよー。お金ですよー」

「あ・そういえば今日給料日だったなホレ」と、アタシはぶつぶつ文句を言っている楽羅にラムネアイスを差し出した。この世で一番ラムネアイスが好きな楽羅は「うー」と低く唸った。

「ホラ、食べんの？食べねーの？どっち？」

「うー・・・」

「あー。早くしないと溶けちゃうな・・・」アタシは唸りながらラムネアイスを一っつと見つめている楽羅にホレホレと追い討ちをかける。

「あゝ、楽羅が食べないんだったら食べちゃおうかな？」

「うゝ！食べる！食べます！」

「よし。じゃ、コレ」アタシはとうとう観念した楽羅に鮮やかな水色のラムネアイスを差し出す。楽羅はぱつと顔を輝かせると、嬉しそうな顔で受け取った。

アタシは面白くなってぷつと軽く吹き出す。なんとなくその顔が見られなくなかったから立ち上がった。するとぐーぐー寝ているミナを視線の中に入った。

ミナは布団も何も掛けずにぐーぐー寝ている。

アタシは何か掛け物持ってこようと思った時、楽羅の声。

「どうしたんですか？ソラさん」もぐもぐもぐ・・・と、ラムネアイスを頬張る楽羅。

「んー、ミナがさー布団も掛けずに寝ちゃってな・・・。何か掛け物掛けようと思って」

「あ、私がやっておきますよ！布もありますし！」

「・・・？じゃ、宜しくな。アタシジューズ買ってくる」

「はい。私はカルピスがいいです」

「・・・はいはい・・・」

アタシは、楽羅の一言も軽く受け流しながらアタシは近くにある

自動販売機に向かって歩き出した。

財布・・・財布と・・・。

財布の中をこそそこそあさりながら確実にお金を捕まえる。

「ねー君、僕等と遊ばない？」

「・・・は？」

冷めたような口調で言葉とは似合わない言い方をしている・・・
と思いながら振り向く。

そこにいたのはとてもそっくりな双子だった。男の。年齢は15、
6位だ。

「僕等良い玩具を探してたんだ。君、面白そうだから。ね、琴？」
こと

「そだね、故^{ゆえ}。ね、君遊ばない？」

「な、なんだよ失礼な・・・」

良い遊び道具かアタシは！とか思っただけに力が入ったが、いやいや喧嘩はいけんと思ったのでまた販売機の方を向きなおし、お金を自動販売機に入れた。そしてカルピスとコーラのボタンをピツピと押す。

「とにかく・・・アタシには構うな。どっか行けよ馬鹿共が」アタシはさらりと暴言を吐き出す。大体の者はこれくらいでどこかに行くのだ。

これでどっか行くだろ・・・。

アタシはゴトンと落ちたジュースを手につ。横目で後ろをチラリと見るとまだ居たので無視して帰ることにした。

スタスタと帰り道を歩きだすと片手を掴まれる。

「帰さないよ？」

につこりと笑った双子の顔。まるで面白い玩具を見つけたみたい
に。

「・・・っざけんな！」

アタシは言うまでも無く双子の片割れに蹴りを入れて手を振りほ
どこうとした。

「何何？これ位の攻撃？」「あはは楽楽」

双子を攻撃をかわし、そのまま双子の片割れの方はアタシをぐい
と自分の方に引き寄せた。

「僕等から逃げられるとも思った？」と、片割れの方がにつこり
と笑う。

「遊んであげる・・・。抵抗してよ・・・もつと」アタシを引き寄
せている方が妙に甘ったるい声を出してふつと微笑む。

「・・・！」

・・・強い。

しなやかな動き、それに隙が無い速さ。

勝てない。双子等と本気で戦ったら絶対に負ける。

その時だった。

「何遊んでるんですか？ソラさん。遅いですよ」

楽羅だ。ヤケにのんびりとした口調で数メートル先の方に立って
いた。

「か、楽羅・・・」

「あ、もう買ってたんですね。あんまり手に持っていると温かくなっ
ちやいますよ。ほら、貸して下さい」

「ふーん・・・もう一人居たの。でも要らないや。ね、故？」

「そだね、琴。こっただけでいいね」

「な、お前等勝手な事をゴチャゴチャ言っな・・・もが」

「黙ってて」口を行き成り片割れに塞がれる。抵抗してみるが全く
効果無し。

「ソラさん・・・ジューズ渡してください。生温なくなっちゃいま

す・・・」

そっちかよ！

と、思ったが口を塞がれているので喋れない。

「僕等に勝てたら、この子開放してもいいよ」と、一歩片方の双子が前に踏み出す。

「望む所です・・・ジュースの為に！」と、楽羅も一歩前に踏み出す。

そっちかよ！お前はジュースしか能が無いのか！
と、思ったが口を塞がれているので喋れない。

ドコ！

一発で楽羅は勝った。双子の片割れはぐ、としゃがみ込む。

太ももの方を蹴ったのだ。多分そこには神経がある。わざとそこを狙ったのだろうか。

「面倒な相手だなあ・・・ほら、琴立てる？」

双子の無事な方が双子のもう一人の方に駆け寄る。それと同時にアタシは開放された。

「まさかこんな人だとはねー。神経狙うなんて思ってもなかったよ・・・殺気出てなかったしそれほど真剣じゃなかったのかなあ・・・やな感じ〜」

「そだね琴。僕等の獲物を横取りするなんてねー？面白かったのになあの子。もっと遊べそうだったのに・・・残念だなあ」

「お前等の方がやな感じじゃ！ほら、行くよ楽羅」

「ラジャです〜」

アタシが走り出すのと同時に楽羅も走り出す。しばらく走った後に振り向くと双子はもう居なかった。

「ふー本当に良かったです〜」

帰り際に楽羅が呟く。

「何がだよ」

「ジュースが」

「よし。今度お前の為に下剤入りジュースたっぷり飲ましてやるからな〜」

「下剤入りですか〜何だか知らないけど美味しそうですね〜」

とか言いつつ『アタシ達の場所』に戻った。

「……………」

ピキ。

…………時間が止まるとはこういう事だろうか。まさに今時が止まった様な気がした。

「…………楽羅」

「はい」

「これは冗談か？」と、すやすや熟睡しているミナを指差す。

「え？ミナさんが？」

「ち、が、う！これはどういう事だと言っているんだよアタシは！」

ミナの顔に白いハンカチが掛かっていたのだ。

自分の脳内の中でチーンと軽い音がした。安らかに眠りたまえ。

「…………ミナを死なせたいのか？」

「え、違いますよ。私はただ掛け物を掛けただけで・・・」

「コレがか!？」

「え、はい・・・」

アタシは思わず頭を抱えた。

ああ・・・。。。

こんな日がいつまで続くのだろうか・・・と思いながら。

（後書き）

双子はまだまだ出るつもりです。このまま終わったら悲しいしね、うん。多分続編です。このまま連載にしていかなーと思ってたけど余裕無いんでwちなみに楽羅の好きな食べ物はラムネアイス。いや、超超好きな食べ物、ですねw^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8821d/>

天然娘＆ヤンキー娘っ！ 2

2010年10月8日15時33分発行